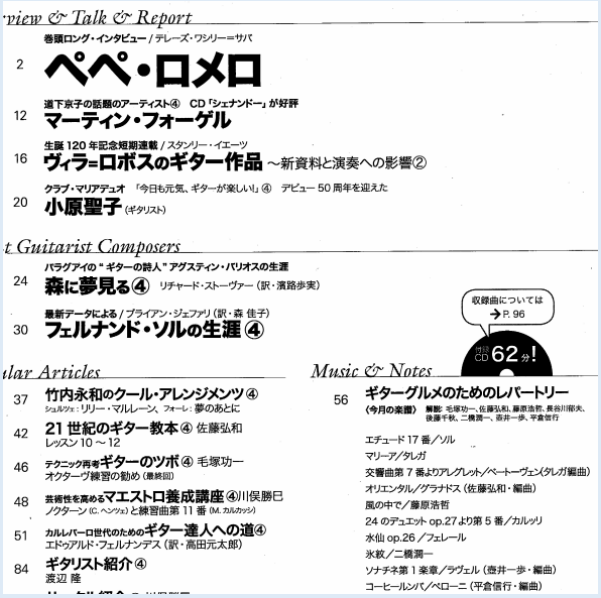
Guitar dream　NO.4(2007. 04)の紹介　by yakateru

表紙



メイン目次

【巻頭ロング・インタヴュー　抜粋・概要】　ペペ・ロメロ

伝説のギタリストペペ・ロメロのインタビュー記事である。前半は、ロドリーゴやトローバ等の作曲家との親交の話からはじまり、演奏することについての話に進む。

- ロドリーゴの「祈りと踊り」。彼が作曲中に思っていたのは、イギリスの詩人ジョン・ダンの「危機に際しての祈り」の詩だ。曲の最初の鐘の音を思わせるところは、ファリャの死を弔う鐘の音だ。彼は、あの曲はファリャの魂とミューズ神の踊りを表している。ハイポジションの和音は彼の体を貫いた稲妻だ。この曲は、劇的に、かつ目立つように弾かなければいけない。
- 演奏について：最も大事なのは、自分の演奏を楽しむこと、何をやっているのか常にわかっていること、そして体が演奏に反応しなくてはならないことだ。
- 弦が必要とする以上の力で演奏するのは「やりすぎ」で、「やりすぎ」ると弦は混迷してしまう。
- 音を出すには、自分が視覚的も音の中央にいることを考えること、外側から音を見たり、音の連続音を単にポン、ポンと眺めていてはだめだ。自分からすべての音は生まれ、その中央に自分がいることを感じ体験してほしい。
- 演奏が終え、自宅に帰ったら、演奏内容がどうであれ常に自分の演奏を褒めるようにしている。ひどい演奏だったとしても褒める。自分が望んだとおりの演奏でなくても、次の朝はやってくるのだから（んんんんん、この言葉、大いに励まされます！）
- 次の朝、目覚めたら自分の演奏がどうだったか考える。改めて検討し練習する。そして消すんだ、悪い結果になってしまったというネガティブな気持ちを、体から一掃するわけだ。
- ギター協奏曲に素晴らしいものがある。マディーナのバスク協奏曲もそうだ。

ペペ・ロメロ氏のインタビュー記事、発表会のたびに落ち込んでいる私にとって、最高のメッセージでした。

【話題のアーティスト紹介　ギタリスト　マーティン・フォーゲル】

よく知らないギタリスト思っていたら、彼の CD、よく聴いていました。リョベートの演奏が素敵です。

- CD のタイトル「シェナンドー」は、ほとんど弾かれないけど素敵な大曲です。

- 【とてもクリアーで、かつ強い主張を感じる演奏ですが・・】ギターは黒澤澄雄のギターを使っています。
- ほとんどが 20 世紀の作曲家の曲です。19 世紀のギター曲のほとんどは、ギタリスト兼作曲家によってつくられたもので、演奏は素晴らしかったかもしれませんが、作曲された曲は、旋律が単純であったり、形式も複雑なものはほとんどありません。天才的な旋律を持たない作品を演奏することはある意味難しいです。その結果、「クラシック音楽」を演奏するのでなく、「アート・ミュージック」を披露することに。
- ギター音楽を愛するというより、音楽を本当に愛する人のためにギターを弾きたいと思っている。

【マエストロ養成講座　第4回】

第 4 回は、ヘンツェのノクターンと、カルカッシの練習曲第 11 番です。いやあ、毎回、いい選曲です。

【ギター　達人への道　第3回：エドゥアルド・フェルナンデス　抜粋・概要】

（フェルナンデスが伝えるギター達人への道。第 2 回目あたりから、ちょっと泥沼状況になってきました。
第 3 回から「メカニズム」についてより詳細に語り始め、今回の 4 回目では、私も苦労している「右手」について集中的に記載されていますが、今一つ理解できずにいます・・・・・）

- 右手で円筒状のものを握る感覚で、手の重みのみで弦の上にのせてみる。手首が捻じれていないことを確認する。その際、右手の位置が正しい位置かを確認する方法は、次の通り。
- A の指を①弦に、m の指を②弦に、i の指を④弦に、p を③弦に置く。これをポジション 2 とする。この状態で、親指 p で 3 弦を繰り返し弾いてみる。次に本来の配置、p を④弦に、i を③弦に置いて　親指 p で 4 弦を繰り返し弾く。これを繰り返すと、筋感覚がこの指の付け根にあることが理解できる。・・・
- 強調している音をアタックしている指は、他の指が感覚的に言うと一つに固まっているのに対し、独立して動いていると感じることにある。ある指が他の 2 本の指と分離していると感じることは、その指の筋肉が独立して動作していることに他ならない。
- 楽器を手に取って遊んでみることは、必要であるばかりでなく有益だ。好奇心に満ちた遊び感覚で様々な体験をすることが最も実りの多い結果をもたらす。・・・・・・

んんんん？？　非常に細かいことを書き綴っている最後が遊びが大切とは、これいかに・・・・・・

【その他の注目すべき記事】

- 「ヴィラ・ロボスのギター作品　新資料と演奏への影響　第 2 回」は、特にあいまいであったスラー記号の用法について、異なる高音の指示、リズム・テンポ記号等の曖昧さについて書かれている。
- 「21 世紀のギター教本：佐藤弘和」：今からギターを始めようという人、基礎からもう一度やり直そうと考えている人向けの教本。 4 回目は、前号に引き続きハーモニクスの話と、音階の話です。
- 「クール・アレンジメント：竹内永和」：バラードの名曲「リリー・マクレーン」とフォーレの「夢の後に」のソロアレンジが掲載されている。
- 「ギターのツボ：毛塚功一」：初級・中級者向けのに演奏テクニックの再考を行うための記事。第 4 回は、オクターブの練習の総括として、ヘンデルのサラバンドとタレガのアラビア風奇想曲の曲を取り上げ実践的にレクチャーしています。。

その他、「海外レポート」「クラブ・マリアデュオのインタビュー（今回は、小原聖子)」等もありますが、第 3 号のメインは、そんなところでしょうか。ちなみに、最後のページにギター教室紹介のリストがあり、福岡では橋口さんの教室だけが紹介されています。

また、Guitar dream には、楽譜と模範演奏 CD がついている。今回は、下記の楽曲が掲載されている。ラベルのソナチネ第 1 楽章が四重奏で編曲されています。

Repertoire of Guitarists

ギターグルメのための レパートリー

付録CDに
模範演奏が
収録されています。

フェルナンド・ソル

モデラート op.35-17

この練習曲は《月光》とならんで有名な曲です。男性の歌が似合うこのメロディーには優しさが感じられます。旋律をよく歌わせ、ストーリーの組み立てや和音の色彩を感じ取りながら演奏しましょう。弾弦ミスが出やすいので右手運指にも一工夫必要です。

（毛塚功一）

フランシスコ・タレガ

マリーア（ガヴォット）

軽快なガヴォットです。左手のポジション移動がとても頻繁で、ポルタメントも多く使われています。途中で一息つきたくなりますが、曲の運びを重くしないようにフレーズ間の受け渡しを速やかにするのがコツです。ポルタメントはグリッサンドとは異なります。装飾音符は突かないで、すくい上げるような気持ちで弾きます。

（毛塚功一）

ベートーヴェン（タレガ編曲）

アレグレット（交響曲第 7 番より）

交響曲第7番の第2楽章冒頭のこのメロディーは葬送行進曲です。低弦の和音はバランスを取るのが難しく、内声の旋律を引き立てるのに苦労します。弾弦の際には右指をしっかりセットしましょう。タレガの知られざる編曲で名曲が奏でられるのはとてもうれしいことです。後続の長調も作ってほしかったと思うのは私だけでしょうか。

（毛塚功一）

エンリケ・グラナドス（佐藤弘和・編曲）

スペイン舞曲第 2 番「オリエンタル」

12 曲ある《スペイン舞曲》中、ソロでよく演奏される第 4、5、10 番と並んで有名な第 2 番。どちらかというと 2 重奏で演奏されることが多いのですが、やはりソロでも弾いてみたいと思うのが人情。少々難しいアレンジになりますがチャレンジしてみる価値は大いにあります。冒頭のテーマを繋げるのは無理…と思ってもしばらくあきらめずに練習してください。繋がるようになります、きっと！

（佐藤弘和）

藤原浩哲

風の中で

冬も終わりやっと気持ちよい季節になってきましたね。「明るい日差しを浴びて草原の風の中を自転車に乗って…」というイメージで作ってみました。これからの季節にピッタリの曲だと思います。

シンコペーションがたくさん出てきます。リズムが取れなくなり、つまったり、走りやすいので、しっかり拍を意識して下さい。

（藤原浩哲）

フェルディナンド・カルッリ

24 のデュエットより（ギター教則本 op.27 より）

第 5 番あたりから曲のボリュームが増してきているところに、カルッリの教育的な作戦も感じられます。今回の曲は 3 拍目から始まるアウフタクトの曲ですから、演奏ではそこを十分意識しながら仕上げましょう。パターンの 1 つは冒頭のように 3 拍目からメロディが始まり、4 小節ほどのフレーズを形作るもの。もう 1 つのパターンは𝄆 3 拍目からのような 3 つの音のグループでリズムを聞かせるところ。とくに初・中級者の場合、後者のパターンで 2 拍目が強くなってしまうのをよく見かけますから気をつけてください。

（長谷川郁夫）

ホセ・フェレール

水仙（ワルツ）op.26

ホセ・フェレール(1835～1916)の得意としたワルツ形式による作品です。途中で少し転調しますが、ト長調の基本は終始一貫しており、分かりやすく親しみやすい作品となっています。

フェレールは生来のロマンティスト、メロディストでした。二重奏曲はもとよりギターソロの曲にも美しいメロディーの作品が多く、またギタリストの作だけに技術的にも無理がないので、作品を通してきっと多くの人に音楽の楽しさ・喜びを感じて頂けるものと思います。

（後藤千秋）

モーリス・ラヴェル

ソナチネ（第 1 楽章）

ラヴェルの、おそらくもっとも親しまれているピアノ曲ではないでしょうか。簡潔にまとまったソナタ形式で、透明感あふれる美しい楽章です。

ギター編曲にあたって、とくに大きく手を加えることはしていません。にもかかわらず、𝄆からの低音の動きが、ギター編曲を待っていたかのような音になっているのが、なんだかおもしろいところです。もちろん偶然でしょう。

（森井一歩）

二橋潤一

氷紋

凍りついた歩道の、ひと魂の氷の表面に様々な模様が浮き出ていました。冷たい沈黙の中で、時間は少しずつその模様を変えていきます。

（二橋潤一）

ホセ・マンソ・ペローニ

コーヒールンバ

イントロ、ゆったりと限りなく美しくハモリを響かせ、続く𝄆ルンバのリズムはハッキリと雄々しく対比させます。𝄇では 3rd のストロークのクリシェ・ラインを大切に。𝄇はチョット Pop な感じにしてみました。メロディーは歯切れよく、2nd、3rd の長いスラーの連続の表情が雰囲気を左右します。息を合わせて盛り上げましょう。リハーサルマークごとに表情がかなり変わっているので、それぞれの特徴をしっかり表現するのがポイントです。

（平倉信行）